

ある神殿でとても美しい娘が水浴びをしていた。
彼女の名前はアリア。
このミズラオン王国の王女である。
そして、これはただの水浴びではなく、
「聖水の儀式」と呼ばれるものであった。

王族の処女娘が一人で三日三晩
この聖なる神殿に籠り、祈る。
「聖水の儀式」を行うのである。
ここはかなり湿度が高い場所で
大量の汗をかくため、水分補給は
重要であった。

アリア

ちゅぽぽ

これはこれでかなりの苦行ではあるが
悪魔を寄せ付けけない儀式として
この国ではとても重要な役割を
果たしていた。

「お母様が亡くなったばかりで私もまだまだ悲しい……」

んん

「でも私と同じくらいに悲しみ落ち込んでいるお義父様のためにも……恩返しをしないと……私が頑張らないと！」

アリア王女のその妖艶な身体を包み込んでいる布地はすでに濡れ肌に張り付き、その身体のラインをいやらしく浮き立たせている。寒さで少し震えながらも聖水で清め、この国の平和を祈り続ける王女の健気な姿がそこにはあった。だが、このミズラオン王国にはある特殊な事情があった。

ちゃぽん

アリア王女の義父であるデピリス王は、影で無能と囁かれるほど国を治める才覚は無かった。よつて実質的にこの国の権力は大神官にあり、政治的にも軍事的にも力が強く、国王はただの傀儡と化していた。

そして、さらに王へ追い打ちをかけたのが唯一の心のより所だった王妃が流行り病で亡くなったのであった。それからデピリス王の心は病んでいく。義娘のアリア王女に妻リナの面影を見るようになりながら……

アリア

はいっ!

ドゥッ!

ムッ

「だ、誰ー？」

「……オレ……だ……
……聖水の儀式は
……どうだ？」

「お、お義父様あー！？」

ド
キ

ち
や
が

ち
や
が

ふ
ら
ら
……

ふ
ら
ら
……

「ちよっー？
こ、こは男性は立ち入り禁止です！
これはたとえ国王であつても
許されない習わしのはずでは？
お義父様がそう私に教えて
下さつたのではありませんか？」

ゴクッ

ドキ ドキ

（どうして裸ー？
お義父様の様子が変だわ！
とてもいやらしい目つきー！）

「ど、どうしてえー！
そんな目でオレを見るっ！
お前までオレを無能と
笑うのかあー？」

「お前も身体だけの
無能ではないか！
処女だけでは
ないかあー！」

「そんなんっ！
ひ、ひどい！」

（誰かがオレの頭の中で
囁いてくるー！
王女の処女を奪えと！）

「そうだ！
そんな処女など
奪つてやろうっ！
さすればオレと
同じ完全な無能
となるぞー！
うひゃひゃひゃー！」

「ヒッ！
ほ、本気なのー？」

はははははは

あゝん

た た た た た

「おおーこれはー？
なんとという柔らかさだ！
お前の母リナに負けない
くらいに実っておるわ！」

「いやあああ！
や、やめてえ！
お義父様あ！」

びん

「い、一回だけだ！
なっ！いいだろ？
こんな処女儀式など
ただの気休めなのだから！」

「ま、国王がそれを
言うのですかー？
ダメエエー！」

おっぱい

おっぱい